



石井病院

じんけいクリニック

Now Vol.120

- Since 2008

JINKEIKAI NEWSPAPER

発行：2018.3

石井病院 健康情報 「花粉症皮膚炎」を知っていますか？

季節の変わり目は、肌のトラブルに悩む方が多く見受けられます。

特に冬から春にかけては、冬の乾いた空気や室内の暖房による乾燥ダメージが蓄積した上に、寒さからくる血行不良が加わって肌のバリア機能が低下しています。

またこの時期、スギやヒノキなどの花粉が多くなると、肌が乾燥したり、顔にかゆみが出るなどの症状を感じる方も多くなります。

花粉の季節にだけこのような症状が出る方は「**花粉症皮膚炎**」の可能性がります。

**● 花粉症皮膚炎とは？**

花粉症皮膚炎は、名前の通り花粉が原因で肌に‘炎症’を起こす疾患です。

※ 花粉症の自覚がない方でも発症します。（鼻や目には症状がなく、皮膚だけに出る疾患です。）

症状は様々で、肌が赤くなる、かゆくなる、乾燥するなどに加え、花粉アレルギーで、鼻をかんだり、目をこすったりすることによって、摩擦で肌が傷ついたりします。

他にも、目の周り・鼻の周りなどの肌の色が他と違っている、赤い細かい湿疹が目立つ、普段使用している化粧品が染みるなど、見た目や日常生活に支障をきたすこととなります。

特に、目の周りや首の皮膚は薄いため、かゆみでかき過ぎると色素沈着がおこって黒ずみが残る可能性があります。また、乾燥もひどくなると肌が粉をふいたような状態になったり、皮がむけてしまうことがあります。

**● 対策は？**

花粉が肌に付着することにより起こるので、基本的には花粉症と同じ対策が必要です。外出時にはマスクやメガネ、帽子を着用して肌の露出を控えると共に花粉が付きにくい素材の服を選びましょう。

また、皮脂が少なく乾燥している部分に症状が出やすいので、保湿を心掛けましょう。

● 受診のすすめ

赤みが出てヒリヒリする状態になったり、どうしてもかゆくなってかき過ぎてしまう場合は、すみやかに皮膚科を受診されることをおすすめします。

一般には、抗アレルギー剤の内服や、ステロイドの塗り薬を使って治療します。体の内と外から肌の抵抗力を上げる対策を行っていきます。傷や黒ずみなどの二次トラブルを防ぎ、長引かせずキレイに治すためにも早めにご相談ください。

**● 当院の皮膚科 担当医・診療時間について**

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|-------------------|-------------|---|---|---|---|---|
| 午前 9:00～12:00 | ● ～11:00 | | | | ● | |
| 午後 16:00～18:00 | ● | ● | | ● | ● | |

担当医：皮膚科部長

堀江 収 日本皮膚科学会認定皮膚科専門医



じんけいクリニック 続発性副甲状腺機能亢進症根治の時代へ

腎臓は、副甲状腺、骨とともに、生体のカルシウム、リンバランスを保持し、細胞外液中のイオン化カルシウム濃度を生理的範囲に保つ精緻なシステムにおいて、中心的役割を果たしている。ゆえに、腎機能が障害され残念ながら末期的となった透析患者さんにおいては、さまざまな骨ミネラル代謝異常が生じる。またこれは骨の病変を生じるのみならず、血管を含む全身の石灰化を介して、生命予後にも重大な影響を及ぼすことが、かなり以前から知られている。

透析患者さんにおいては（正確には腎機能低下のかなり早い段階から）、血中カルシウム値の低下、リン値の上昇、活性型ビタミンD3濃度の低下などを介して、前頸部、甲状腺の背側に存在し、上下左右、合計4個（時に異所性として5個以上も）、米粒ほどの大きさしかない副甲状腺が長期的かつ持続的に刺激される。その結果、二次的に、腎不全を介して続発的に、副甲状腺機能亢進症の病態が完成される。それは時に、自立性を獲得した不可逆的な変化をたどり、高回転骨代謝（繊維性骨炎）に歯止めがきかないといった悲劇的な病態から、手術的摘除以外ないといった結末も稀ならず散見されてきた。この50年あまり、末期腎不全患者さんへの透析治療が普及し、絶望的であった命が延命されるようになったという福音の一方で、その裏において人類は永い間この続発性副甲状腺機能亢進症、カルシウム、リン値コントロールに苦慮してきたと言える。それは同時に透析担当医の苦悩でもあった。

血中リン濃度を低下させるためのアルミゲル製剤が使用中止となった1990年代初頭、それに変わる炭酸カルシウム製剤が復活し発売されたが、効力の弱さや血中カルシウム濃度の上昇ゆえ、コントロールは不十分な時代が続いた。またその頃と前後して、内服ビタミンD3製剤の発売が開始されたが、副甲状腺機能がある程度までは抑制できても一方で血中カルシウム、リン値の上昇を招き、結果的に動脈硬化を初めとした異所性石灰化を助長するなど負の面も散見された。その後2000年代となり、内服薬ではなく注射剤としてのビタミンD3製剤の発売や、それを用いたビタミンDパルス療法、カルシウムを含有しないリン抑制剤の発売などにて、ようやくまずまずのコントロールレベルに達したが、十分に満足できるレベルとは言えない冬の時代が続いた。

この永い冬の時代によりやく終わりを告げるブレイクスルーが起こったのは、2008年、レグパラ（商品名）の発売後からである。副甲状腺機能を抑制するためには、カルシウムを上げリンを下げる必要があるといった従来の発想から離れ、カルシウムではないけれどもカルシウムのふりをして副甲状腺のカルシウムレセプターに結合し、カルシウムが十分に足りていると勘違いさせる（ある意味だまして）ことで目的を達成させたこの作用機序（カルシウム受容体作動薬；カルシミメティクス）は人類初であった。これは同時にカルシウムもリンも上昇させず、むしろ低下させ、異所性石灰化も回避できるという面で画期的薬剤であった。時に胃腸障害などの消化器症状が散見されることが唯一の欠点であったが、昨年（2017年）4月からは同様の作用機序でかつ半減期の長い注射剤のパーサビブ（商品名）が発売されたことで、この副作用もほとんどなくなり、飲み忘れなどもなくなったためか効果もさらに確実となってきている。

じんけいクリニックにおいてはこれらの薬剤を駆使することで、先月（2018年2月）の透析患者さん（透析導入後6か月以上経過した方）の副甲状腺（インタクトPTH）採血結果値は、ガイドラインの目標値を97%で達成されていた（近い将来、100%が見込まれる）。小生が医師となった28年前では到底考えられない、隔世感のある数字であるが、結果的に今後は動脈硬化や繊維性骨炎の減少などから、更なる生存率の改善、QOLの改善が、じんけいクリニック全ての透析患者さんで期待され、また予想される。10年後、20年後、その意義は歴史が証明することになるであろう。



じんけいクリニック

院長

ふくし よしひこ
富士 剛彦

■ 医療連携相談室

TEL 078-918-1512 FAX 078-918-1725
平日 9:00～12:00 14:00～17:00
土曜 9:00～12:00
担当 酒見 古門 上野

編集・発行

医療法人社団 仁恵会 石井病院 情報管理委員会
〒673-0881 明石市天文町1-5-11
TEL 078-918-1655 FAX 078-918-1657
<http://jinkeikai-group.or.jp/ishii/>